

登山ブームというけれど

登山ブームと言われる昨今である。8月16日、徳島県の剣山に登った。標高1,954m、石鎚山に次ぐ西日本で二番目に高い山である。1,440mの見ノ越まで車道が上がり、リフトを利用すれば1,710mの西島まで、足を使わず登ることができる。

ということもあり、剣山は大勢の登山者で賑わっていて、登山がブームであることを証明していた。一時代前のように、中高年登山者一辺倒ではない。山ガールがいて、ファミリーが登っていて、観光客も登って来ている。

ここでは、ぼくがちょっと眉をひそめたりすることもある山ガールが真っ当に見える。なぜなら、登りに来ている人のほとんどは、ジーパンに運動靴だ。山ガールのそれなりに決まったファッションに安心感を覚えるという、矛盾した心境になる。

山頂直下で出会ったファミリーは、パパもママも娘も、つっかけサンダル。背中に雨具や水筒が入っているはずのザックはない、空身だ。小学生低学年と思われる子が、一人で下ってくる。パパはどこ、と聞くと、後ろを指差す。かなり遅れてパパとママとが下ってくる。子供の姿は、すでに視野にない。

うーん、困った。この日は晴天で風もない。しかし、いつなるときに天気が悪化するかわからない。雨具や水やおやつを入れたザックを背にしておくことが、危機管理というものだ。

見ノ越まで車が上がっているから登り易く、山頂にはいつでも逃げ込めるヒュッテもあって、安心登山ができるモデルケースのような剣山だが、ディズニーランドではない。分岐があるとすると、先行した子供が左の道に入ったことを知らず、親が右の道に入ってしまったら、重大な結果を招きかねない。

いつだったか丹沢大山の登山口で、母親と子供二人のパーティーに出会った。小学生らしき二人は、すぐにでも走り始めそうな勢い。母親が口酸っぱく二人に言い聞かせている。「ママより先に行っちゃ、絶対にダメよ。山道を走っちゃダメ、いいこと」。山のリスクが分かっているママさんだなど、話を傍らで聞いていて、安心だったし、うれしくなった。

登山ブームというけれど、違和感を覚えるのはぼく一人ではあるまい。日本の山はほとんどの場合、クライミング技術は必要ない。だからと言って、安全が保証されているわけではない。現在の登山ブームは、情報過多が作り出した幻想のように思えてならないのだ。その象徴的な遭難事故が、「道迷い」。

道迷いが増加しているということは、読図やルートファインディングという、基本を習得しないまま山に入る、安易な登山者が増加しているということだ。テレビや雑誌で、山の露出度が高いと感じる昨今である。そんなマスコミの喧伝に乗せられた結果の登山ブームであってはなるまい。